

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 翻訳であって翻訳でない字幕翻訳   |
| <b>Author(s)</b> | 島田, 洋子  |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-3 : 2-3   |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2325">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2325</a> |
| <b>Rights</b>    |   |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 翻訳であって翻訳でない字幕翻訳

島田 洋子

## 1. はじめに

翻訳には大きく分けて3つの分野がある。文芸翻訳、実務翻訳、そして映像翻訳である。この3つは「翻訳」とひとくくりされるが、映像翻訳、特に字幕翻訳には一般的な「翻訳」という概念からは、かけ離れたものが要求される。字幕翻訳者に要求されるものは「翻訳」ではなく、いわゆる「要約」だ。「翻訳」に分類されながら厳密に「翻訳」とは呼べない日本における字幕翻訳をその歴史や現在のいくつかの実情を通して述べたい。

## 2. 字幕翻訳の歴史と種類

字幕がつく以前の外国映画はサイレント（無声）映画で弁士がストーリーやセリフを代弁していた。サイレント映画ではシーンの途中、説明やセリフが外国語で出てくるため弁士はそれを脚色して訳し語っていたのだ。その後、映画はトーキーの時代を迎え役者の声が映像に加わった。日本で最初に字幕がついた映画はアメリカで制作されたゲーリー・クーパーとマレーネ・ディートリッヒ主演の『モロッコ』（1930年公開）。日本公開は1931年（昭和6年）で翻訳者は田村幸彦氏だった。当時の日本には字幕制作技術がまだなく、田村氏を始め字幕制作創成期の翻訳者たちは船と鉄道を使い20日もかけてニューヨークまで行き翻訳をして、字幕を焼き付けたフィルムを日本に送っていた。日本での字幕制作が可能になり彼らが帰国したのは1933年（昭和8年）だった。そして彼らは平均的な日本人をサンプルに実験を行い、字幕づくりのための基本的なルールを作った。そのルールが現在も基本とされている1秒3、4文字、縦字幕で1行13文字（現在は10文字）、最大2行というものだ（英語のセリフが4秒あるとすると、その字幕は日本語で16文字以内ということになる）。テレビやDVDの場合は横字幕が主で文字数も1行15文字前後、最大2行になっている。こ

れ以上、文字数や行数を増やせば映像の邪魔になるし、何より時間内に読みきれなくなる。役者が話し終わった後も字幕だけがスクリーンに残ると違和感があるため字幕は役者のセリフに合わせて出すことになった。

## 3. 翻訳であって翻訳でない理由

文芸翻訳も実務翻訳も文字を文字に直すものだが、映像翻訳の字幕翻訳は話し言葉を文字に直したのだから伝えられる情報量が半分以下になることが多々ある。人気小説のファンなどは映画化された作品を鑑賞した後に「字幕が正確ではない」と不満を口にしたりすることがあるが、文字数も時間も制限のない小説の翻訳と字幕が違っているのは当然のことなのだ。しかし伝える情報量は激減しても観衆に映画のストーリーを正しく伝える必要があるため字幕翻訳は「要約」や「意識」にならざるを得ないということになる。そして映画制作国の観衆には当然理解できることでも日本では理解されないという共通認識の違いがある場合、それを字幕に織り込んで日本人の観衆に伝えなければならない。ただ単に話し言葉を文字に要約するだけではすまない場合もあるのだ。

さらに現在は差別語、卑語、身体的不具合を示す昔ながらの表現、病気関連、民族・人種関連、商品名などの禁止用語や避ける風潮の言葉が数多く存在する。これが世界で統一されていれば問題は発生しないのだが、日本だけとなると翻訳は容易ではなくなる。アメリカを例にとると、アメリカでは差別が存在するという前提で言語に表れる現実を描くが、日本は差別を解消するという姿勢で表現自体を禁止する方向にある。だから「狂気」をテーマにした映画で“crazy”を連発しているのに「狂」という文字を字幕で使えないというようなジレンマに陥ることがある。さらに「子供」は「人身御供」を想像させるという理由で「子ども」と表記することが主流になってきている。1

文字の増減が重要な字幕翻訳者にとって誰でも読めて理解できる文字だったり、的確な表現なのにある理由でその表現が使えない場合などは、忠実に翻訳したくても出来ないということになる。

#### 4. 字幕翻訳の現状

伝える情報量に限界があり、様々な制限が課されている字幕翻訳だが吹き替えの映画が以前より多くなったとはいえ、字幕翻訳は依然人気がある。アメリカなど海外では外国映画は吹き替えになるのが一般的だ。日本で字幕が受け入れられる理由として日本人の「本物志向」と識字率が挙げられる。役者にとってセリフ回しは重要な演技の1つである。日本語に吹き替える声の出演者もプロばかりでスタジオ収録に立ち会えば彼らの間髪入れぬ迫真の演技に驚嘆するがやはり「本物」にはかなわない。そしてもう1つ理由を挙げるとすると、単一民族の日本人は識字率が高く「読む」という作業を負担に考えない。日本人が字幕翻訳を好む傾向の裏にはこのような理由がある。

最後に数ある字幕映画の中で必ず名ゼリフの1つに挙げられるのが『カサブランカ』の「君の瞳に乾杯！」。この字幕の原文は“Here’s lookin’ at you, kid!”である。相当大胆な意識であるにもかかわらず人々の心に残っているのは、この字幕が雰囲気をとらえているからに他ならない。このように観衆に分かりやすい字幕を提供するという目的で字幕翻訳者には時にオリジナルのセリフにならないようなことを字幕にすることが許されるし求められることがある。この点から言えば文字数や時間に制限はあるものの、字幕翻訳以外の翻訳より表現の自由があるのかもしれない。やはりここでも「翻訳」に分類されながら字幕翻訳は厳密な「翻訳」ではなく、要約、意識を前提としたある種独特の「翻訳」と言える。

(しまだ・ようこ聖学院大学基礎総合教育部特任講師)